

異年齢クラスにおける遊び集団の変化の過程に 関する研究ノート

—3歳児の人間関係に着目して—

古野 誠生¹⁾ ・ 飯塚 恭一郎²⁾

A Study Note : The Process of Changing the Play Group in Multi-Age Class of Nursery: Focusing on the Relationship of 3-year-Old Children

by

Nario FURUNO ・ Kyoutiro IIZUKA

【キーワード】 異年齢 同年齢 人間関係 遊び

I. はじめに

この研究は、保育現場における子ども同士の間関係について、子どもが異年齢あるいは同年齢の友だちをどのように受け入れて関係性を深めていくのか、その変化と人間関係の育ちに、ある種の道筋や規則性があるのではないかという仮定の元に、長期間の保育現場の観察記録を分析したものである。

「核家族化の進行」や「きょうだいが少ない」といった実態を背景にして、現代の子どもの育ちを取り巻く問題として異年齢の子どもの関わりが希薄になっているという指摘がされて久しい。少子化については、出生数や合計特殊出生率などの統計調査がその実態を明らかにしているが、きょうだいについては、国立社会保障・人口問題研究所が実施している「出生動向基本調査」からその実態を伺うことができる。それによれば、夫婦の最終的な平均出生子ども数とみなされる「完結出生児数（夫婦の最終的な出生子ども数）」が、2010年の第14回の調査において初めて2人を下回り、1.96人となっている。

この第14回調査の結果概要には、「第7回調査(1977年)以降、半数を超える夫婦が2

受理日 平成30年10月30日

¹⁾ 純真短期大学こども学科 講師

²⁾ 純真短期大学こども学科 准教授

人の子どもを生んでおり、今回も同様であった。しかし、子どもを生まなかった夫婦、および子ども1人（ひとりっ子）の夫婦が前回に引き続き増え、これらを合わせると今回はじめて2人未満が2割を超えた。逆に3人以上の子どもを生んだ夫婦は減っており、「出生子ども数3人の割合は2割を下回った」¹⁾と説明されており、「出生子ども数2人未満の夫婦が増加」と結論づけている。この調査結果が、異年齢の子どもの関わりの希薄さを直接証明するものではないが、現代の子どもが、家庭にも地域にも多くの子どもがいた戦後のベビーブームのような環境で育っているわけではないことは容易に想像できる。

もっとも、そうした子どもを取り巻く環境の変化と少子化、そして異年齢の関わりの希薄さに対しては、2010年の完結出生児数1.96人以前から憂慮されていた。1999年（平成12年）に施行された保育所保育指針には、すでに「第11章 保育の計画作成上の留意事項」の中に「5 異年齢の編成による保育」²⁾という項目があり、保育所において異年齢で編成される組やグループで保育を行う場合の指導計画について十分な配慮をするように言及している。

そして、これ以降の保育所保育指針の改定や、あるいは幼稚園教育要領、認定こども園教育・保育要領においても、異年齢編成での保育の重要性が明記され現在に至っている。そのため、保育現場では同学年、同年齢の子どもの関わりと平行して、異年齢の子ども同士が関わっていける環境作りや保育内容が積極的に展開されている。

とりわけ保育所では、0歳児から6歳児の子どもが同じ施設で生活を送る環境であるため、こうした異年齢の子どもが関わっていく環境を意図的に整えることに取り組みやすい。長時間の生活になるので、クラス編成そのものを異年齢で構成し、日常生活のレベルで自然に異年齢の子どもが関わりあいながら生活を織りなすことを基盤にしている保育所も多い。

一方、幼稚園の場合は、そもそもが「学校」という法的な位置づけもあって、小学校同様に同年齢・同学年でクラス編成がなされることが一般的であったが、前述のような現代の子どもが置かれている生育環境や、私学の幼稚園において実施が進んでいる「満3歳児保育」あるいは、預かり保育等の長時間保育の一般化といった昨今の状況から、保育所同様に異年齢の子どもの関わりを保育の重点として捉え、積極的に異年齢保育に取り組む幼稚園が増加している。

個々の教育・保育施設においては、教育課程や全体の計画の中で「同年齢」なり「異年齢」なりの原則的なクラス編成が規定されているはずであるが、どちらが適切かという問題ではなく、どちらの編成においても子ども同士の豊かな人間関係を育む関わり合いや共有体験があり、保育者は、その育ちを見通して保育のねらいや保育内容に合わせて「同年齢」あるいは「異年齢」の子ども集団の編成を適切に選んで保育を実践しているというのが実態ではないかと思われる。

ただ、これは、大部分が保育者側の意図をもって構成する保育の枠組みである。果たして当の子ども自身は、同年齢編成での友だちとの関わりと異年齢編成での友だちとの関わりをどのように受け止めて関係を広げて行っているのだろうか。

異年齢編成では、年長の子どもには年少の子どもへの思いやりの気持ちが育まれ、年少の子どもは年長の子どもの姿に未来の自分の姿を重ね、あこがれの気持ちを持つと言われている。同年齢編成であれば、発達段階が近い子ども集団となるだけに、異年齢編成

よりは意思の疎通、共有、共感など相互コミュニケーションが取りやすい関係性になるだろう。これによってたとえば協同的な活動を円滑に取り組むことが可能になり、連帯感や達成感を得ることも期待できる。

子どもが、長期の生活の流れの中でこうした「同年齢」による人間関係と「異年齢」による人間関係について、どこに軸足を置いて関係性を広げているのか、またその軸足は移っていくものなのか、あるいは両方をひとつの軸にしながら人間関係を構築しているのか、子ども同士が人間関係を織りなすその過程の中に、人間関係の軸足の置き場と置き方に何らかの道筋や規則性、法則性のようなものがあるのではないかという疑問が本研究の出発点である。

本研究では、異年齢でクラス編成をしている保育園の協力を得て、1年間に渡って定期的な観察によりそのクラスに所属する子どもたちの人間関係の変化を追った記録を得ることができた。この記録に記された子どもの遊びの様子やエピソードをもとに分析を試み、前述の疑問の答えに近づく糸口を探ることとした。

II. 研究方法

1. 対象クラス

保育所の3歳児（年少）、4歳児（年中）、5歳児（年長）の異年齢クラス。年少は男子3名、女子5名、年中は男子3名、女子5名、年長は男子4名、女子7名の計27名で構成されている。主に2名の担任保育者で保育を行っている。

2. 観察場面および期間

観察期間は、2017年4月11日から2017年12月26日までの計18日であった。観察時間は、9時から12時30分（昼食終了時）までである。観察は自由遊び場面を取り上げた。

3. 観察方法

クラス全体の子ども・環境・保育者の援助の関係性を観察するために、川邊（2008）による「保育マップ型記録」³⁾を参考にフィールドノートに記入し、補助的に保育環境全体の写真記録をとった。観察後は、保育マップ型記録にエピソード記述も付け加えた上で日にち毎に記録・整理をし、USBメモリーに保存。個人情報等の流出のないように管理・保管した。

4. 保育計画の閲覧・記録

子どもの観察をすべて終えた後に、観察クラスの「年間保育計画」「月間保育計画」「週案・保育日誌」の閲覧・記録を行った。記録に際しては、個人情報等の流出のないように管理・保管した。

5. 分析

まず、3歳児の子どもの様子を軸にして観察した記録を概観し、子ども同士の関わりと子ども集団の変化の様子の分析と考察を行った。その後、観察クラスの「年間保育計画」「月間保育計画」の吟味と観察記録との照合を行い、異年齢クラスにおける3歳児の様子と子ども集団の変化について考察をした。

6. 倫理的配慮

本研究の実施にあたり、事前に協力園に調査目的を説明し、調査実施への許可を得た。

また、研究倫理遵守に関する誓約書にもとづき説明を行い、承諾を得た。

Ⅲ. 観察の結果と考察

1. 子どもの観察記録

観察した記録を概観すると、表1に示されるように、それぞれ大きく7つの時期に分けて、特徴づけすることができた。

表1. 3歳児の様子を軸にした観察記録の概略

時期	観察日	天気	3歳児	保育者	時期	行事	3歳児の遊びの様子
①	4月11日	小雨	雨の為、オープンバルコニーで運動あそび、活動中は、廊下につ伏せて寝転がったり、園庭を眺めたりする 〈室内遊び〉 保育者に誘われて、お絵かきをする	お絵かき遊びに誘導する	4月～5月上旬	イースター礼拝	自分の遊びを見つけることができていない。保育者が用意したお絵かきや、紙切り遊びをする
	4月18日	晴	〈外遊び〉 ・水たまりで、一人一人遊んでいる。(水遊び) 〈室内遊び〉 ・はさみで紙を切る遊び、お絵かきをしている	紙切り、お絵かきコーナーを用意する			
	4月25日	晴	〈室内遊び〉 塗り絵(女児) 積み木(男児A)	塗り絵コーナーの用意			
	5月2日	晴	〈外遊び〉 ・外遊び時、年長児の家族ごっこに赤ちゃん役として一緒に遊んでいる ・それぞれのお遊び場で他の子が遊ぶのを眺めていたり、ひとりで遊んでいる 〈室内遊び〉 ・お絵かき ・年長男児が読んでいる紙芝居ごっこにお客さん役で見ている(男児A、女児B)				
②	5月23日	曇り	〈外遊び〉 ・滑り台 ・砂でお皿に料理を作ったりしている(おままごと) 〈室内遊び〉 お絵かき(女児A) おままごと(男児C、女児E)		5月下旬(5/23)～	親子遠足	外遊びでは、遊具、砂でおままごとをする。室内遊びでは、引き続き個別でお絵かき等をする子と、おままごと、積み木をし出す子がいる。
	5月30日	晴	〈外遊び〉 ・園庭の遊具で、年長児・年中児のようにやりたいと言っている ・男児Cが観察者と二人だけの関わり合いを求めてくる 〈室内遊び〉 ・保育者と積み木でお風呂遊び(男児A・B) ・お絵かき(女児A)	・担任保育者が、男児二人の遊びに加わり、遊びの発展と保育者との関係づくりをしている ・保育者が男児二人の困った行動に注目すると、更にエスカレートする			
③	6月20日	晴	〈外遊び〉 ・おままごとで砂を食べ物に見立て料理する 滑り台で遊ぶ(男児A・B) 〈室内遊び〉 ・ペンでお絵かき、スピログラフ定規を使ってぐるぐる模様を描く(男児A・B・C、女児B・C・D・E) ・絵本(女児A)		6月(6/20)～7月(7/25)	花の日礼拝 こどもまつり プール活動(7/14から)	それぞれにしたい遊び、机上でボードゲームなどをしている。室内遊びにおいて、おままごと、積み木遊びで遊ぶ子どもがいない
	7月18日	晴	〈室内遊び〉 ・ボードゲーム ・パズル(男児A・B、女児A・D)	プール前の準備体操でふざけ合っている年少男児A・B、年中男児に、保育者が「一緒にしようか」と声かけ、三人の中に入る			
	7月25日	晴	〈室内遊び〉 ・マグネットゲーム(女児D) ・動物フィギュア(男児A、女児C) ほとんどの子は、自分たちのペースでそれぞれ遊んでいる。男児Cが、自分の遊びに取り組みずら観察者を遊びに誘ってくる 〈プール〉 ・男児B:年齢の区別なく、水をかけあったりして遊ぶ ・男児C:友だち同士のやりとりがなく、観察者の気を引こうとしてくる				
④	8月8日	晴	〈プール〉 ・男児A:一人でバケツにカラフルボールを入れて遊んでいる ・女児B・C・E:ベビープールに水を入れて「わっしょい、わっしょい」と言って持ち上げ遊ぶ 〈室内あそび〉 ・積み木、レール遊び(男児A) ・ごっこ遊び(女児B・C)		8月(8/8、8/22)	プール活動 お盆休み	上の年齢が遊んでいる積み木やレール遊びをし始める。異年齢との交流をし始める。
	8月22日	晴	〈室内あそび〉 ・おままごと、絵本(女児C・D) ・男児B:年中男児と一緒にレール遊び。「〇〇君(年中男児の名前)が大好き」と言っている ・年長女児のおままごとと年少女児Eが赤ちゃん役で混ざっている ・年少女児Bは年長男児と一緒にお絵かきをしている				

⑤	9月19日	晴	<ul style="list-style-type: none"> 外遊び スコップを持って走りまわる(男児B・C) 室内あそび 食べ物カルタを年少児だけでやっている(女児A、男児B・C) 紙で制作(女児A・B) 				
	9月26日	晴	<ul style="list-style-type: none"> 外遊び ボール蹴り 室内あそび ブロック(女児D・E) お部屋づくり(男児A、女児C) お絵かき(女児B・C) すごろく遊び(男児B・女児C) 		9月 ～10月上旬 (10/10)	プール活動(8/29まで) おじいさん・おばあさん とあそぶ会 年長児お泊り保育	同年齢同士でカルタ、ブロック遊び、お部屋づくりのあそびをする。同年齢同士での遊びが多くなる。
	10月10日	晴	<ul style="list-style-type: none"> 外遊び 三輪車遊び(男児A・C) 室内あそび カルタ:読み札を読めない為、これと言って皆に見せて、取り合っている。そのうち、ルールが分からなくなり、終わる(女児B・D・E) 女児A:年中女子と同席で制作 ブロック遊び。男児Cが猛獣フィギュアを持って、男児Aに「ガオー」と言っている(男児A・C) 				
⑥	10月24日	晴	<ul style="list-style-type: none"> 外遊び 三輪車遊び 年中男児とヒーロー遊び(男児B) 室内あそび 年長女児とお部屋を作ってままごと遊び(女児D・E) 年中男児とブロック・レール遊び(男児A・B・C) 				
	10月31日	晴	<ul style="list-style-type: none"> 外遊び 年中女児と溜り台であそんでいる(女児B・C) 室内あそび 年中女児と病院ごっこ(男児A・C、女児A) 年中男児とバスごっこ(男児A) 年中女児とパズル(女児D) 		10月下旬(10/24) ～11月下旬	運動会 芋ほり遠足 感謝祭礼拝	外遊び、室内あそび共に異年齢での遊びをしている。ごっこ遊びでの異年齢での遊びも多くなった。
	11月14日	晴	<ul style="list-style-type: none"> 室内あそび 食べ物カルタ(女児A・E、男児A) 年中児とバスごっこ(男児B) 年中児が男児Bに対して一方的に指示する 年中女児と折り紙(男児C、女児B・E) 	<ul style="list-style-type: none"> カルタを子ども同士で遊ぶのは、難しかった為、保育者が入って一緒に楽しむ 折り紙は、魔女のステッキを保育者と一緒に作る(あらかじめプログラムを考えていたもの) 			
⑦	12月26日	晴	<ul style="list-style-type: none"> 外遊び 年長女児・年中男児と警察ごっこ(男児A、女児B) 室内あそび おままごと、お店屋(女児B・E) カルタ(女児D・E) 年少児だけで遊んでいる 年長・年中・年少児でわらべ歌あそび 	保育者とわらべ歌遊びをする	12月	クリスマス会	おままごと、お店屋ごっこ、カルタ等年少児だけで遊んでいる

① 4月～5月上旬

4/11のオープンバルコニーで観察されたようにうつ伏せで寝転がったり、園庭を眺めていたり、自分たちで遊びを見つけ、展開させることができない。その為、室内遊びでは、保育者が用意したお絵かきや塗り絵、制作コーナーでそれぞれ遊んでいる。

② 5月下旬

外遊びでは、遊具で遊んだり、砂場で道具を使っておままごとをする。室内遊びでは、引き続き4月と同様にお絵かきをする子どもと、おままごとや積み木をし始める子どもがおり、子どもの自分からしたい遊びが定まり始めた。

③ 6月～7月

室内遊びでは、机上での簡単なゲームやパズル等、それぞれにしたい遊びなどをしていく。しかし、おままごとや積み木遊びで遊ぶ年少児がいなかった。

④ 8月

室内遊びにおいて、積み木やレール遊びの道具を共有して、年上の子どもと同じ場所で遊んでいる。遊び道具を他の子ども(異年齢)で共有しなければならない為、遊び道具を介した異年齢でのやりとりと、異年齢での子どもの遊びが始まる。遊びの中には、年長児が意識して年少児を誘うもしくは受容する遊び【遊び1】と年少児が年長児

の遊びに加わる遊び【遊び2】がある。

【遊び1】

8/22 の観察において：年長児のおままごとに年少児が赤ちゃん役で加わるような遊びが展開されていた。

【遊び2】

8/22 の観察において：年少男児の構成遊び中の発言「○○くん（年中児の名前）大好き」と言いながら、年中男児が遊んでいるプラレールの遊びに加わる。

⑤ 9月～10月上旬

外遊び、室内遊び共に同年齢同士での遊びが盛んになった。室内遊びでは、カルタ、ブロック遊び、お部屋作りなど2名、3名の年少児での遊びを深め始める。カルタ遊びでは、読み札の文字を読めないが、読み札を皆に提示することによって、見本合わせの要領で年少児同士で遊びを進めることができていた。

⑥ 10月下旬から11月下旬

外遊び、室内遊び共に、異年齢とあそんでいる。室内遊びでは、8月に観察されたような積み木やレール遊びに加えて、バスごっこ、病院ごっこ、お部屋をつくってのおままごと等のごっこ遊びを異年齢同士、特に年中児と遊んでいる。

⑦ 12月

室内遊びでは、年少児だけでごっこ遊びやお店屋さんコーナーで遊ぶ。

①から⑦までを、どのような子ども集団で遊びを形成していったかという視点で整理すると、図1のようになる。

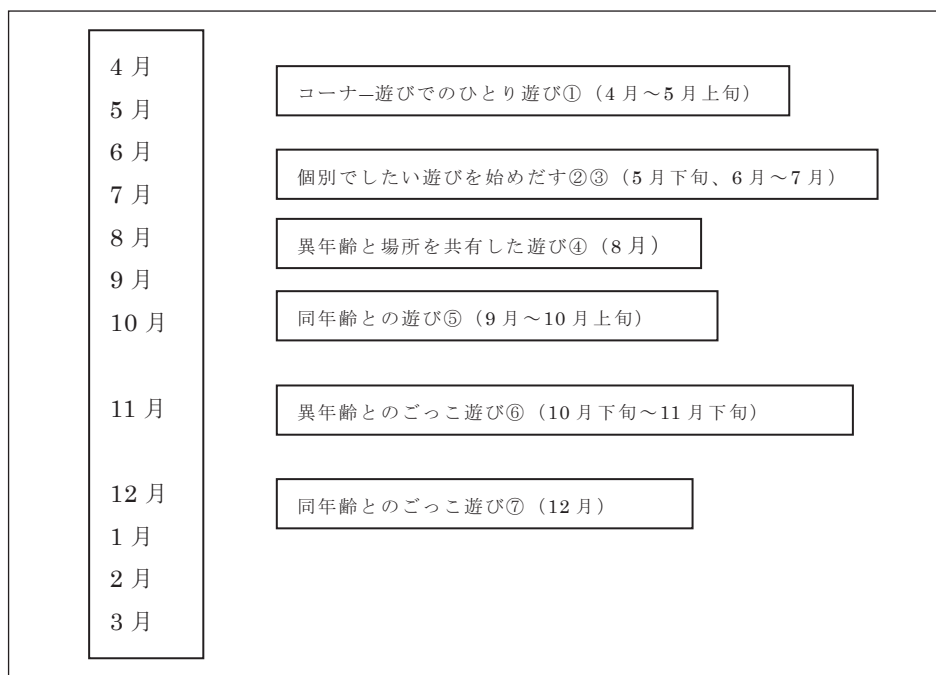


図1. 子ども集団の遊びの形成過程

特徴的なのは、遊びの子ども集団の構成に関して、同年齢集団の時と異年齢集団の時とが、周期的に繰り返し変化していることである。

図1のような遊び集団の変化は、量的研究においても観察されている。白井・杉野(2002)によれば、幼稚園の異年齢(3、4、5歳児)での自由遊び時間の対人交渉を分析した結果によると、3歳児は入園当初の春(4、5月)、夏(6、7月)では同年齢からの交渉よりも、異年齢からの交渉が多く、秋(9、10月)になると同年齢からと同年齢への交渉が急速に増加している。⁴⁾

本観察においても、春から初夏にかけて、3歳児が異年齢の子どもと関わる以下のエピソードを拾うことができた。

【エピソード1】

H29.5.30 晴 園庭での自由遊び時間において

園庭の吊り輪の遊具で年中女児が遊んでいる。吊り輪の輪に足を入れて、ブランコにしている。観察者に揺らしてと言うので揺らす。それを見ていた年少女児2名が「〇〇ちゃんもしたい」と言う。観察者は、「(自分で)できないところは、まだ上がれないところなんだよ」と言って、様子を見る。それでも「〇〇さん(年長児クラスの名前)、〇〇さん(年中児クラスの名前)のようにやりたい。」と言って、観察者に手助けを求めてくる。

【エピソード2】

H29.4.11 雨 異年齢同士で食事ができるように、保育者がグループ分けしたテーブルでの食事場面において

年少女児Eがテーブルにスープをこぼしてしまった。年長男児Aは、さっとテーブル拭きを配膳カートに取りに行き、こぼしたものを片付けている。その後、年少女児Eの為に、紙ナフキンを用意している。その後、年少女児Eが食べ終わった後の片づけに慣れていなかった為、担任保育者が年長男児Aに「Eちゃんに片づけ方を教えてあげてね」と声かけする。年長児Aは、順次「これ」「次はこれ」というように片付ける物を手渡して教えている。

【エピソード1】からは、園生活に慣れてきて、園内で楽しむことができるさまざまな遊びに目が向き始めた3歳児が、遊びの場所を共有したり、そこで遊んでいる年中児や年長児にあこがれのまなざしを向け、遊びに対する興味をかき立てられたりしている様子がうかがえる。あるいは【エピソード2】については、園生活における生活習慣が身につく、身辺自立が確立している年長児が、同じ場所で食事をするまだ不慣れな年少児に対して、やさしくありのままに年少児を受け止めているという年長児らしい気配りの様子がある。

これらのエピソードからは、園生活の安心の拠り所となる「好きな遊びと遊ぶ場所」の目星がついてきた3歳児が、春から初夏にかけては、異年齢の関わりによって違う遊びへの興味や関心をかき立てられる刺激が得られたり、生活におけるさまざまなトラブルや困難を解消していけるだけのサポートが得られたりすることで、一層安心感をもって園

生活を送ることができているとわかる。これは、図 1 に示した「個別でしたい遊びを始めだす②③」の時期から、年長児との関わりが多くなった「異年齢と場所を共有した遊び④」の時期へ移行した様子と捉えることができる。

ただ、「異年齢と場所を共有した遊び④」の時期の観察記録を詳しく見ると、異年齢の接点は多くなっているものの、それぞれが満足する充実した遊びに発展するには至っていない。そのことが、夏以降の「同年齢とのごっこ遊び⑤」の時期に再び移行していった要因ではないかと推察される。

では、その後はそのまま同年齢との遊びが継続し深まっていくのかと思いきや、再び異年齢の関わりが活発になっている。それが図 1 の「異年齢とのごっこ遊び⑥」の時期となる 10 月下旬から 11 月下旬にかけての様子となる。この「同年齢とのごっこ遊び⑤」から「異年齢とのごっこ遊び⑥」への移行を促した要因としては、10 月上旬から 11 月中旬まで、園行事の関係で年長児のみ同年齢で行う保育内容が増えたことが挙げられる。それによって、室内での自由遊びの時間には年長児が加わることが少なく、遊びの集団が年中児、年少児で構成されることになったと考えられる。

例を挙げると、この時期には「運動会の準備での年長児のみの応援の練習時間」、「年長児のお泊り保育の為の準備時間」、「年長児のみでの外出活動（稲刈り、小学校見学）」といった保育が年長児を対象に展開されていた。観察記録には、年長女児とのままごと遊びの様子が記録されているが、他はほぼ年中児と年少児との関わりであった。

そして、この遊びの子ども集団の構成は、冬にかけて再度変化する。「異年齢とのごっこ遊び⑥」の時期から「同年齢とのごっこ遊び⑦」の時期に移行している。この変化の要因についても、園行事に関わる保育内容の展開によって説明することができる。観察園は、キリスト教を礎とした保育理念の保育所の為、例年「クリスマス会」においてキリスト生誕劇が行われている。11 月下旬からクリスマス会までは、保育内容として劇の練習が多く実施されている。その際に、セリフ等が多い年長、年中児での合同練習があり、年少児だけの室内の自由遊び時間が多くなっていた。その為、物理的に同年齢のみの遊び時間が多くなったことで、その子ども集団での遊びが活発になり、「同年齢とのごっこ遊び⑦」の時期に移行したものと考えられる。

IV. 指導計画との照合による分析

さて、ここまで、異年齢クラスでの遊びの子ども集団の変化について、観察記録やエピソードをもとに 7 つの時期にまとめ、簡単に変化の様子とその要因について考察した。子ども集団の変化を促したものとして、子ども自身の心的状態やクラスの生活環境、遊びの環境構成などさまざまな要因が複合的に絡んでいることが推測されるが、大きな要因として「保育内容の展開」が挙げることができるだろう。

これは園行事のスケジュールや内容に始まり、とりわけその保育内容の展開においてどのような子ども集団で取り組むかによって、日常の園生活や遊びにおける子ども同士の関わりや集団構成になんらかの影響を及ぼしていることが観察記録の考察から浮かび上がっている。

そこで、ここでは、担任保育者が子ども同士の関わりや子ども集団の変化をどのように予想して保育の計画を立て、保育内容を展開しようとしたのか、あるいは修正していこ

うとしたのかを、この年度の年間指導計画と月間指導計画を吟味し、観察記録と照合しながら子ども集団の変化について分析していくこととする。

1. 年間指導計画

3歳児の年間指導計画において、「年間目標」「基礎的な事項」「ねらい」「内容」を抜粋した。(表2) その中から、他児との関わりや遊びに関する記述について下線をつけ、抜き書きした。

表2. 3歳児年間指導計画

年間目標		基礎的な事項			
保育者との信頼関係のもと、安心して過ごす中で、褒められたり認められたりすることで自信をもって生活できるようになる。食事や排泄などの生活習慣も自立が進み、保育者に見守られながら身のまわりのことを進んでやる。また、遊びやさまざまな活動を通して、保育者や友達と関わることを喜び、自分の気持ちや感じたことを言葉で伝えたり表現できるようになる。		・個々の生活リズムに合わせて、生理的欲求が満たされ快適に過ごすことができるように、日課を整える。 ・自我がはっきりしてくるが、他者との関わりの中でうまく表現できないことがある為、個々の発達に注目して個別に援助する ・遊びや生活の中で、異年齢での関わりを持つことができるように配慮する ・保育者と一緒にいることで安心することができるような関係を構築していく。			
	1期(4~5月)	2期(6~8月)	3期(9~12月)	4期(1~3月)	
ねらい	・幼児クラスでの生活の流れを知る ・保育者に親しみ、一緒に遊ぶ ・ <u>気の合う友だちと楽しく遊ぶ</u>	・生活の仕方を知り、衣服の着脱や排泄など自分でやってみようとする ・自分の好きな遊びを楽しみ、保育者や友達と親しむ	・色々な遊びに興味・関心を持ち、全身を動かして取り組もうとする。 ・生活への見通しが持てるようになり、積極的に行動しようとする。	・色々なことに興味を持ち、一人でもまたは友達とやりたいことを目指して活動する。 ・身の回りのことがほぼ自分でできるようになる。 ・進級することに期待を持つ	
内容	・登降園の身支度、着脱を周りの大人に手伝ってもらいながらする。 ・友だちと会話を楽しみながら食事をする ・手洗いの習慣が身につく ・トイレの使い方を知る ・安心して昼寝をする ・遊んだ後の片づけを保育者と一緒にする	・自分でできることと保育者の助けが必要なことなど伝えられるようになる。 ・嫌いな食べ物にも挑戦し、少しずつ食べてみる ・食事の中の正しい姿勢などが身につく ・手や足の清潔が快いものと感じ、手洗いの習慣などが身につく ・排泄後の始末を介助してもらい、自分でやってみる	・自分の思ったことやして欲しいことを言葉で表現する ・ <u>年長児、年中児のしていることに関心を持つ</u> ・道具や素材の使い方が分り始め、表現することを楽しむ ・安全に必要なことが分り、守ろうとする ・簡単な用事を頼まれると喜んでする ・手洗い、衣服の調節などめんどうがあるが、自分ですることだということが身につく	・ <u>気の合った友だちと遊ぶことを楽しむ</u> ・いろいろな素材を使って、考えたり工夫したりして遊ぶ ・自分一人ではできないことは友だちを協力しようとする ・食事のマナーが身につく ・排便の後始末が自分で出来るようになる ・体の変調が伝えられるようになる	

(1) 年間目標・基礎的な事項

「遊びやさまざまな活動を通して、保育者や友達と関わることを喜び」「遊びや生活の中で、異年齢での関わりを持つことができるように配慮する」のように、同年齢・異年齢での関わりについて記述されていた。

(2) ねらい・内容

1) 1期(4~5月)

ねらいにおいて「気の合う友だちと楽しく遊ぶ」

2) 3期(9~12月)

内容において「年長児、年中児のしていることに関心を持つ」

3) 4期(1~3月)

ねらいにおいて「一人または友だちとやりたいことを目指して活動する」、内容において「気の合った友だちと遊ぶことを楽しむ」

他児とのかわり・遊びについての記述が、「気の合う友だち」(1期)から、「年長児、年中児」(3期)、そして「一人または友だちとやりたいことを目指して活動する」(4期)へと変化している。つまり、年間計画においては「関係を築きやすい同年齢の人

間関係での遊びや活動」から「異年齢の人間関係による遊びや活動」へ移行することを想定していることが読み取れる。そして4期には、同年齢・異年齢を意識することなく「気の合う友だち」という関係性を軸に、遊びそのものに関心を向けることができるように保育のねらいが設定されていることがわかる。

2. 月間指導計画

観察クラスの月間指導計画において、「3歳児の姿」「3歳児のねらい」「(異年齢クラスの)クラス運営」「(異年齢クラスの)環境構成」「(異年齢)クラス全体の評価・反省」を抜粋した。(表3)その中から、他児との関わりや遊びに関する記述に下線をつけ、要所を抜き書きした。

表3. 3歳児月間指導計画

	3歳児の姿	3歳児のねらい	クラス運営	環境構成	クラス全体の評価・反省
4月	<ul style="list-style-type: none"> 新しい環境になり緊張や不安が見られる 新しい道具に興味を持ち、色々な道具を使って遊んでいる 	<ul style="list-style-type: none"> 新しい保育士、環境に慣れて安心して過ごす 生活の方法、一日の流れを知る いろいろな道具の使い方をを知る 	<p>3歳児が生活の流れを理解し、見通しを持って生活できるよう、個別に声をかけていく</p>	<ul style="list-style-type: none"> 道具の種類を増やし、量を減らす どこで何をやるかがわかりやすく、シンプルな導線の空間を作る 	<p>空間を変えたことや援助により、遊びを広げたり少しずつ異年齢間の関わりが増えてきた</p>
5月	<ul style="list-style-type: none"> 新しい環境にも慣れ、自分を出して生活をしながら仲間関係も良く、困ったときには助け合う姿も見られる 片づけまですることができ、道具や制作物が散乱していることがある 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の思いを言葉にして時間がかかっても伝えるようになる 自分がつかったものを片付けて、クラスの道具が整えられることの心地よさを知る 	<p>子ども達同士がイメージを共有し、遊びを深めていくことや遊びの中で異年齢児ともより関わりが増えるように援助をしていく</p>	<ul style="list-style-type: none"> 子どもが安心安全に過ごせるように、遊びの時も周囲に危険なものはないか、遊びと遊びの距離は適切かなど常に環境が整えられるように配慮をする 	<p>自分の考えを言葉にしながら遊ぶことで、一緒に遊んでいる友だちと共通のイメージをもって遊ぶことができた</p> <p>戸外からの誘導に時間がかかってしまい、次の活動にスムーズにつなげないことがあった。</p>
6月	<ul style="list-style-type: none"> 自分の思いを言葉にして表現しようとするが、うまく伝えられず、手がでしてしまうこともある 戸外で遊ぶことを楽しんでおり、様々なことに挑戦しようとしている 苦手な物も少しずつ食べようとしている 	<ul style="list-style-type: none"> 戸外で十分に体を動かして遊ぶ。 身の周りのことを保育者に見守られながら自分でしようとする 友だちと同じ遊びをするなかで、友だち関係をより深めていく 	<p>異年齢同士の関わりを通して、小さい子は大きい子の真似をしたり、大きな子は小さい子に思いやりの心をもって接したりと、様々な経験が出来るように関わりを促していく</p>	<ul style="list-style-type: none"> 子ども達が自由に遊べる空間を広くとり、のびのびと遊べるようにする。それぞれの遊びが近すぎる時には少し話したりと援助していく。 窓をあけたり、扇風機をつけたりなど快適に過ごせる環境になるようにしていく 	<p>暑い日が多く、室温がかなり高くなることもあったので、エアコンをつけたりするなど、子ども達が体調を崩してしまわないように留意をした。</p> <p>おまつりに向けた制作などを楽しみながら行い、行事への期待感を高めていた</p>
7月	<ul style="list-style-type: none"> 気の合う友だちとの関係が深まり、ケンカをしながらも関わることを喜んでいる 運動量も増し、それにもない苦手な物も少しは興味しようとするようになってきている 	<ul style="list-style-type: none"> 一日の生活の流れが分かり、自分でできることをすすんでやってみようとする 友だちに自分の思ったことや感じたことを分かりやすく伝える 	<p>休日での出来事を再現しやすいような描画制作の道具やごっこ遊びの道具をつかい人との関わりが多く持てるように援助していく</p>	<ul style="list-style-type: none"> 運動量が増える時期になるので、室内でも粗大運動ができるように空間や道具を準備する 	<p>行事に向けた活動に対しても意欲的に取り組んでいた。友だちと協力し合う場面も増えた。気の合う友だちとの関係がより深まった一方で仲間関係が固定化しているように感じる。少しずつ関係が広がるように課業などを充実させていく必要がある</p>
8月	<ul style="list-style-type: none"> 友だちとの関係が深まったことで、自分の思いをしっかりと伝えようとしている。時にはお互いの思いが合わず、ケンカになることもある 	<ul style="list-style-type: none"> 身のまわりの自分で出来ることをすすんで行おうとする 自分の思いを言葉にして、ゆっくりでも分かりやすく伝える 	<ul style="list-style-type: none"> 担任同士の連絡やサブの保育士と連絡をこまめに行い、協力して保育にあたる 特に子ども達の様子については、小さなことでも連絡を行い、体調の変化などに気を付ける 	<ul style="list-style-type: none"> 室温などに十分気をつける 色々な素材に触れられるように、様々な素材とその素材に合わせた道具を用意する 	<p>新しい道具がきっかけとなって異年齢での交流がより多くなった。プールや虫取りなど夏らしい遊びを十分楽しめ、水を怖がる子どもほとんどいなくなった。食事テーブルの向きや場所を変えた為、少し混乱があったので、段取りよくすすめていく必要があった。</p>
9月	<ul style="list-style-type: none"> 礼拝や体育など集団での活動に自らすすんで参加するようになった 保育士との関わり喜び、関心の幅がとどても広がっている 	<ul style="list-style-type: none"> 集団での活動の中でさまざまな友だちと関わることを喜び 友だちの気持ちに気づき、時にはゆずったり、我慢することも大切であることに気づく 	<p>担任以外の保育士も子どもの理解ができて保育にあたるように、日加や記録物を用意しておく</p>	<ul style="list-style-type: none"> 昼食時間を少しずつ遅くしていく よう日課を整えていく 季節の移り変わりが感じられるような環境整備を整えていく 	<p>午前中の遊びの時間を長くして昼食時間を遅くする日課に変更したが、毎日体操を始めたこともあり、疲れやすさや昼食を遅くできないことがほとんどであった。活動と休息のバランスをとりながら少しずつ日課を整えていきたい。</p>
10月	<ul style="list-style-type: none"> 友だちや保育士との会話を通して苦手な物でも興味して食事を楽しむようになっていく 年上の子とカルタや積み木あそびなど関わることを楽しんでいる 	<ul style="list-style-type: none"> 簡単なルールや約束を守り、友だちや保育士とカルタや鬼ごっこを楽しむ 気温や活動に合わせて衣類の調整しようとする 	<ul style="list-style-type: none"> 毎日体操を入れて身体を動かすことの喜びが十分に感じられるようにしていく おとまり保育や運動会など行事が多くなるので、日々のことが丁寧になれて落ち着いて生活できるようにする 	<ul style="list-style-type: none"> 秋の自然物をつかった遊びが楽しめるように道具を用意する 行事に対する見通しや期待が高まる掲示物を用意する 	<p>行事が多く、クラスとしての課業回数が少なかった。年齢ごとの活動時間も多かった(年長クラス)こともあり、年中児と年少児の関わりがより多くなり関係が深まったこととはともなう。</p>
11月	<ul style="list-style-type: none"> 年上の友だちとの関わりが増えて仲間関係が広がっている 体力がつき、食量が増えて、苦手な物もたべようになっている 	<ul style="list-style-type: none"> わらべうたに親しみ、保育士や友だちと歌ったり聞いたりすることを楽しむ 友だちとおにごっこ遊びを楽しみ日常の言葉をつかい再現する 	<ul style="list-style-type: none"> 各コーナーの遊びがより充実するように日々の計画を細かく立てていく 	<ul style="list-style-type: none"> クリスマスの制作の道具や素材を用意する 秋から冬への季節の移り変わりを感ずる壁面を飾る 	<p>異年齢で関わりがより増えて、互いを理解しながら遊びをすすめるようになった。食事時間も遅くしたことで遊びの時間も多くなった。保育士の働きかけもあり、さまざまな役割あそびができたことも、よりいっそう人との関わりが多くなったと思う</p>
12月	<ul style="list-style-type: none"> 身の周りのことを自分ですすんで行うようになってきた。カルタやゲームなどルールのある遊びを子どもだけで楽しめながら遊びをすすめることができるようになった 	<ul style="list-style-type: none"> ゲームにはルールがあり、ルールを守ることでよりあそびが楽しいことをしる ゆくゆくでも言葉で伝えようとする 家庭のおもちゃは持っていないよう習慣づける 	<p>クリスマス練習が多くなり、クラスですごす時間が減る。異年齢でのつながり、関わりを時間を大切に意識的に働きかけていく</p>	<ul style="list-style-type: none"> 少しずつクリスマスの壁面を増やしたりしていく 練習内容によって日課を変えていく クラスだけでなく組と日課を合わせて計画をたてる 	<p>毎日のアドヴェンツ礼拝や行事に向けた活動によってクリスマスの喜びが日に日に増しながらすすむことができた。日々、日課が変わるなどあわただしさがあつたが、子どもたちははじめて落ち着いてすすむことができたと思う</p>
1月	<ul style="list-style-type: none"> 新しいおもちゃの使い方や使える時間をよく理解し、自分たちで出した片付けたりすることができる。子どもだけでゲーム(カルタや絵合わせ)をすることを楽しんでいる 	<ul style="list-style-type: none"> 友だちの気持ちを受け止めながら、ルールを守ってあそぶことの楽しさに気付く トイレに行った後には手を洗うなど基本的な生活習慣をめんどくさがらずきちんと行うようになる 	<p>担任の異動等あり、体制も変化するもので、不安になる子どももいる</p>	<ul style="list-style-type: none"> 気温が低く戸外遊びの時間が短くなるので、ホールを使用したり、体を動かすわらべうたを取り入れながら十分体を動かせるようにする。また、交通安全教室が近いので交通に関する掲示を行う。 	<p>担任の変更があり、年長児グループを中心に不安をうけている様子が見られた。また、食事中や午睡時に声が大きくなったりと落ち着かない雰囲気があった。気温が低い日も多、あまり外に出たがらず、体を動かさないことがあった。</p>
2月	<ul style="list-style-type: none"> 同年齢の友だちと一緒にレング積み木を並べておうちごっこをしたりする。役割ははっきりしていない 自分の思いと反することを友だちに言われたりすると泣いてしまったりがある。また、その嫌だった気持ちを直接言葉で伝えることもある 食べられる量を自分で考えて、「減らしてください」と保育士に言葉で伝えられる 	<ul style="list-style-type: none"> 友だちとトラブルになった際に、すぐに泣いたり、怒ったりするのはなく、ゆくゆくでも言葉で伝えようとする 戸外から帰ったら、まずは手洗いうがいをするで行う 	<ul style="list-style-type: none"> 担任の変更があり、不安に思っている子ども、保護者もいるので、丁寧に関わり、落ち着いて生活が送れるように配慮していく 保育士同士がコミュニケーションをより取りながら、クラスの様子や配慮事項などを伝達をこまめに行い、共有していくようになる 	<ul style="list-style-type: none"> 節分などの行事もあるので、行事に沿って部屋に飾りを置いたり、鬼がでる絵本を入れたりする。 ソファの位置を移動させて、配膳ができるように小さなテーブルを置く。 	<p>家具を移動させ、環境を大きく変えたが、慣れることなく生活を、それぞれの遊びを行っていた。年中児グループのスプーンつぎを始めた。ぶつこったり、こぼしたりすることもあまりなく、ほとんどの子がクリスマスにつくことができた</p> <p>環境の変化に伴い、コップの移動もあったので、マークの貼り換えなどを行って、より丁寧に伝えられた方がよかった。</p>

<p>3月</p>	<p>気温が少しずつ上がってきて、「寒い」と言っ戸外にでたがらなかった子もあぶかったや砂遊びをして遊ぶようになった。室内ではお店屋さんや病院ごっこを同年齢の友だちと楽しんでいる。午睡時には自分から進んで静かに身体を休めようとしている。手洗いも自ら丁寧に出来るようになってきた</p>	<p>友だちとトラブルになった際に、すぐに泣いたり、怒ったりするのではなく、自分自身の思いを言葉にして伝えるようになる。友だちとごっこ遊ぶなどをする際に、自分が経験したことを表現し、一緒にあそんでいる友だちに伝えたり、友だちの考えなども受け入れながら、イメージを共有して遊べるようになっていく</p>	<p>担任が変わり一か月経つが、不安がまだ残っている子もいると思うので、その気持ちを受け止めながら、安心して生活ができるように援助をしていく 保育者同士がよくコミュニケーションを取りながら、子どもたちの様子を見守っていけるようにする</p>	<p>来年度に向けて家具の位置や道具の量・種類を少しずつ変えていき、急激な変化がないように配慮する 就学や進級を不安に思っている子もいるので、少しでも安心して生活できるように動線を工夫したり、落ち着いた雰囲気になるようにする</p>	<p>5歳児は卒園に向け、卒園式の練習に真剣に取り組み、一人ひとりが感謝の思いを抱いて、言葉にしたり、行動したりしながら表現をしていた。 3・4歳児は年長児の卒園を祝うとともに寂しさや不安を感じながらも進級することを楽しみにしている</p>
-----------	---	--	--	--	--

(1) 6月

- ・3歳児のねらい：「友だちと同じ遊びをするなかで、友だち関係をより深めていく」
- ・クラス運営：「小さい子は大きい子の真似をしたり、大きな子は小さい子に思いやりの心をもって接したりと、様々な経験が出来るように関わりの機会を増やしていく」

(2) 7月

- ・3歳児の姿：「気の合う友だちとの関係が深まり、ケンカをしながらも関わることを喜んでいる」
- ・クラス運営：「ごっこ遊びの道具をつかい人との関わりが多く持てるように援助していく」

(3) 8月

- ・クラス全体の評価・反省：「新しい道具がきっかけとなって異年齢での交流がより多くなった」

(4) 9月

- ・3歳児のねらい：「集団での活動の中でさまざまな友だちと関わることを喜ぶ」

(5) 10月

- ・3歳児の姿：「年上の子とカルタや積み木あそびなど関わることを楽しんでいる」
- ・クラス全体の評価・反省：「年齢ごとの活動時間も多かった（年長クラス）こともあり、年中児と年少児の関わりがより多くなり関係が深まった」

(6) 11月

- ・3歳児の姿：「年上の友だちとの関わりが増えて仲間関係が広がっている」
- ・クラス全体の評価・反省「異年齢で関わりがより増えて、互いを理解しながら遊びをすすめるようになった」「保育士の働きかけもあり、さまざまな役割あそびができた」

(7) 12月

- ・3歳児の姿：「子どもだけでゲーム（カルタや絵合わせ）をすることを楽しんでいる」

(8) 2月

- ・3歳児の姿：「同年齢の友達と一緒にレンガ積み木を並べておうちごっこをしたりする」

(9) 3月

- ・3歳児の姿：「お店屋さんや病院ごっこを同年齢の友だちと楽しんでいる」

月間指導計画（以下、月案と称する）は月単位で立案されるものであるが、立案のべ

ースとなるものは、「先月の子どもの姿・実態」である。前述の年間指導計画（以下、年カリと称する）も1年間12ヶ月の子どもの育ちの姿を想定して立案されるものであるが、月案は、月単位で子どもたちの生活や遊びの様子、育ちの姿を丁寧に捉え、その実態を元に、年カリ立案時の想定を修正していくかたちで翌月の月案を作成していく。つまり、そこには年カリ作成時の想定や予想になかった姿や実態が記されていることになり、そこから予想されるその先1ヶ月の子どもの育ちの姿と、それによって導き出した保育のねらいを明確にしたものとなる。当然、先月の保育の振り返りや反省、評価といった保育を修正していくためのファクターも盛り込まれる。

そうした保育の実施記録である月案の「3歳児の姿」と「クラス全体の評価・反省」を、筆者の観察記録を照合した結果、8月、10月、11月においては、筆者の記録と担任保育士の子どもの様子の見立てがほぼ一致していることがわかった。図1の「異年齢と場所を共有した遊び④」と8月の記述、「同年齢との遊び⑤」と10月の記述、11月の「異年齢とのごっこ遊び⑥」の記述部分がそれに当たる。

月に2回程のペースで、スポット的な観察によって筆者が捉えた子どもの人間関係の変化の記録と、毎日子どもと向き合っている担任保育者の捉えがほぼ一致しているということは、この人間関係の変化が、単に観察できた日に限った様子ではなく、おおむね月単位で周期的に変化している様子であることが、担任保育者による子どもの実態の把握においても確認されていると言える。

ただ、月案を精査すると、この変化について、保育のねらいとして計画的に意図した保育内容の展開とその結果であるかどうかまではわからない。10月の月案のクラス全体の評価・反省の記述には「年齢ごとの活動時間も多かった（年長クラス）こともあり、年中児と年少児の関わりがより多くなり関係が深まったことはとても良かった」とあるが、これを見ても、そもそも異年齢の関わりを深めるといった人間関係に係る保育のねらいと意図が指導計画として立案されていたことによる結果ではなく、行事に関わるさまざまな保育内容によって年長児がクラスで異年齢の友だちと自由に関わっていける時間が少なくなったことで起こった副次的な結果であると考えるのが自然だろう。

本章冒頭に、子ども集団の変化を促す要因として「保育内容の展開」を挙げたが、月案との照合からも、子どもの遊びの集団が異年齢から同年齢へあるいはその逆へと周期的に変化するのには、子どもたちの人間関係から自然に発生した流れや指導計画による保育者の意図によるところではなく、月案で立案した行事も含めた保育内容の展開によるものが大きいと考えられる。

V. おわりに

ここまで、観察記録の分析と考察、そして指導計画との照合と考察によって論を進めてきた。これによって明らかになったことが2点ある。ひとつは、子どもの遊びの集団が、異年齢から同年齢へあるいはその逆へと周期的に変化、移行を繰り返すということである。このような遊びと遊ぶ子どもの人数や集団構成の変化について、松山(1984)は、ある幼稚園の3歳児クラスに在籍する女兒の遊びの様子を4月から12月にかけて観察し、その記録を分析・考察をした結果、当該女兒M子の遊びの様子が、自己中心性のふたり遊び→ひとり遊び→模倣→ふたり遊び→連合遊び、と変化していったと述べている。⁵⁾こ

れは、子どもの遊びと遊びの人数が必ずしもひとり遊び→平行遊び→連合遊び→協同遊びといった具合に一次的に変化するものではないということを示している。

本研究では一緒に遊ぶ子どもの年齢に着目し、同年齢と異年齢という遊び集団の変化の様相を明らかにしたが、これも必ずしも一次的な変化ではなく、あたかも振り子のように異年齢とのかかわりと同年齢のかかわりを往復して揺れ動きながら、人間関係の広がりや社会的スキルを習得していく様である。これは本研究の問いとして挙げた「人間関係の育ちと変化の道筋や規則性」に繋がっていくものとして捉えていきたい。

そしてもうひとつは、子どもの遊びと遊びの人数や集団構成の変化を促すものとして、保育者が展開する保育内容がその契機として働いている可能性が高いということである。これは、筆者の観察記録と担任保育者が立案した指導計画との照合によって見えてきた。もっともこれは変化を促す要因のひとつであって、保育内容の展開が変化を左右する絶対的な条件であるとは言い切れない。

そのほかの要因を考えるにあたっては、たとえば異年齢集団での遊びの様子を観察した小谷ら(2003)の研究には、異年齢集団で遊んでいても子ども一人一人の内的操作には違いがあるという結果が示されており、示唆に富んでいる。この中で、3歳児では、何か道具を使いその道具を他のものに見立てるといったことや、お茶をそそぐまねをする、ふりをするといった遊びの傾向が強いこと。また4歳児では、何かになりきるといったことが主になり、その役の中で遊びを通して相手との関係を作り出すことができること。そして5歳児では、状況を創りあげる外的活動があり、その後、役になりきるといった行動が見られることなどが挙げられている⁶⁾。つまり、異年齢集団で遊んでいても、必ずしも全員が同等・同質の遊びを楽しんでいるわけではなく、子どもの年齢や認知発達レベル、興味・関心といった要因によって、実際の個々の遊びの内的操作にはばらつきがあることが示されている。

ただ、それが同じ空間や時間の中で「遊び」を通して展開されたときに、個々の遊びの内的操作が、遊びの情景や刺激といった相互的な情報として仲間に伝播し、それを契機に遊びの変化が促される場合があると思われる。今回観察した遊びの中でも、最初の異年齢でのごっこ遊びは、それぞれの年齢に見合った内的操作のおもしろさの中で展開していたごっこ遊びだったが、この遊びを通して、3歳児は、上の年齢の子どもの遊びでの振る舞いを知らず知らずのうちに観察、学習し、社会的スキルを習得していたと捉えられる様子があった。その経験が、同年齢でのごっこ遊びの充実と満足感に繋がり、それが遊びと遊びの集団構成の変化として表れたと推測される。

さて、本研究のまとめとして、以上の2点については明らかになったが、こうした遊びの変化や遊び集団の構成変化や移行について、当事者である子ども自身がどのようにそのことを受け止めながら遊んでいるのかというそもそもの問いに迫るには至らなかった。そこに至るにはまず、観察のペースと頻度を上げて研究データとしてより詳細な記録を得ることが必要だろう。また、個々の子どもの遊びの質的分析と評価をしていくことも求められる。あるいは、保育内容の展開という要因と結びつけて変化を見るならば、指導計画にある保育展開のスケジュールだけではなく、物的・空間的な保育環境の吟味や、そこに関わる保育者の人的環境の役割等も視野に入れた考察も欠かせない。これらのことを今後の課題として心に留め、研究を深めていきたい。

【付記】

本研究をすすめるにあたりいつも温かく迎え入れてくださる子どもたち、お忙しい中でも、ご協力いただける保育所の園長先生、主任の先生をはじめ担任の先生方に、深く御礼申しあげます。

引用文献

- (1) 国立社会保障・人口問題研究所 (2011) 第 14 回出生動向基本調査・結婚と出産に関する調査夫婦調査の結果概要. 国立社会保障・人口問題研究所
- (2) 厚生省 (1999) 保育所保育指針. 厚生省児童家庭局
- (3) 川邊貴子 (2008) 明日の保育の構想につながる記録のあり方～「保育マップ型記録」の有用性～. 保育学研究, 46(2). 109-120
- (4) 白井万土香・杉野欽吾 (2002) 幼児の対人行動に関する縦断的研究. 神戸大学発達科学部研究紀要, 10(1). 1-11
- (5) 松山安雄・植田明・藤原和子・寺柿容子・乾久美子 (1984) 3 歳児における集団参加への過程 (1) -ひとり遊び、ふたり遊びをめぐる-. 日本保育学会大会研究論文集, 37. 196-197
- (6) 小谷牧子・住野紀子・伊藤美佳・糸洲理子・奥村隆介・瀧川光治・玉置哲淳 (2003) 保育場面におけるごっこ遊びの関係活動モデルによる分析一年齢ごとの内的操作・関係面の分析から-. Educare, 24. 47-66